

# 農業がつくる故郷の風景

## JA北つくば明野普通作部会



島田　敏（しまだ　さとる）さん（海老ヶ島）

身近な風景が耕作者のみなさんの力に支えられていることを知り、熱い思いがこみ上げました。

みなさんは、筑西市の約半分（54％）が農地であることを知っていますか。青々とした夏の田んぼや黄金色に輝く秋の稲穂、晩秋に咲くソバの白い花など、農地は季節の景色を届けてくれる私たちの身近な存在です。

今回は、JA北つくば明野普通作部会の大吉宏明（おおよしひろあき）会長、北島松雄（きたじままつお）さんに故郷の農地を守る苦労についてお話を伺いました。

### 普通作部会とは

JAには生産品目毎に部会がありますが、「普通作」という言葉は、あまり馴染みが無いかと思います。農業で米や麦、大豆、ソバなどの主食となる作物を生産することを指す言葉です。明野地区には30年以上前から普通作部会があり、現在28人の会員が米を中心に生産しています。

明野普通作部会では、年2回、現地検討会を行い、新品種の栽培研修や肥料関係の研修などを行っています。全国に先駆けて米の新品種「にじのきらめき」の栽培研修を行っていて、活動の柱になっています。現在、本市の米の作付面積のうち41％をにじのきらめきが占めており、全国有数の生産地となっています。



大吉　宏明　会長



北島　松雄　さん



JA北つくば明野普通作部会のみなさん

### 農地周辺の環境整備

農地の風景は身近な存在ですが、「農作業後は農地内でトラクターの泥を落として通行の妨げにならないようにしたり、農地から雑草が飛び出さないように草を刈ったりしています。耕作者が減ったことで、圃場（ほじょう）に向かう農道の除草や路肩の草なぎが大変です」と時間と手間がかかっていることを大吉さんが教えてくれました。

地球温暖化の影響で除草剤に強い雑草が増えて作業が大変になり、これまで所有していなかったスライドモア（草刈り作業機）を購入して除草を行うなど、生産者にとって非常に厳しい状況となっているそうです。

### 10年後が心配

近年、農家数減少に伴い、耕作放棄地が増えています。一度耕作を止めてしまうと雑草が生い茂り、耕作できる環境に戻すためには多くの時間と労力が必要です。また、耕作放棄地は景観だけでなく、ゴミの不法投棄などの問題があり、周辺の生活環境の悪化にもつながります。北島さんは「街中にも農地がありますが、大型機械が入れない場所が多く、肥料の臭いや道路の土埃対策にも手間が掛かるため、作業が大変です。10年後には街中にも耕作放棄地が出てくるのではないか心配です」と今後の問題を憂います。

### 将来を担う世代へつなぐ

本市は「にじのきらめき」やソバも全国トップクラスの生産地ですが、市内の人にもあまり知られていません。「地元の特産物をたくさん食べて、筑西市の農業を多くの人に知ってほしいです。将来を担う世代が安心して農業を続けられるように、ぜひ食を通じて応援してください」と二人は声を揃えます。

### 取材を終えて

今回の取材をとおして、当たり前と思っていた景色は、耕作者のみなさんの力で成り立っていることを知りました。地域の農業のことを知り、故郷の風景を守る農業を盛り上げていくことが、私たちにできる一番の景観保全なのだと気付かされました。